１／２９　公開授業研究協議会

１、授業者反省

- 先行授業の際には、三者の立場に立ち、足りないところはどこだったのかという視点を与え、授業を進めていく展開で授業を進めたが、価値の押さえが足りないと感じ、主人公ひとりの立場に絞り、気持ちを考えていく展開に変更した。焦点を主人公に絞ったことで、より深く考え価値に迫ることができた。
- 児童の回答に対する切り返しにより、より多くの意見を出させて考えを深める展開ができた。
- ワークシートに考えを書けない児童に対する言葉掛けや、自身に振り返らせる場面でのよりよい問いかけの言葉があれば教えてほしい。
- 他の意見を聞くことで考えの幅が狭まってしまうと考え、最後の振り返りを児童同士で伝え合う時間は取らなかった。
- 正しいことを行う理由として、「怒られたくない」という動機を持つ児童が多いように感じる。善悪の判断をするときに、他律的なものでなく自律的動機を持たせたい。

２、研究協議より

- 学級経営が素晴らしい。学習規律がしっかり身についている。
- 板書の見やすさ、児童の言葉を短い言葉でまとめる上手さ。
- 質問の切り返し、切り込み方が見事だった。それにより児童がより深く考えることができていた。
- 中心発問に対するやり取りの時間が多く設けられていてよかった。「なぜそう思うのか？」を全体に広げ、皆で深く考えることができていた。
- 主人公が「正しくないこと」と感じた「SLに登ること」がなぜ「正しくないこと」なのかをもっと具体化するとよかった。「正しくないこと」とはどういうことなのかを。
- 振り返りで書いた内容を児童同士で考えを共有できるとよかった。

  →児童によっては「そのように書けばよいのか。」と思ってしまい、自身の本当の考えを出さなくなる可能性があるため、児童同士で考えを伝え合う時間はあまり取らない。しかしワークシートの掲示は行っているので、友だちの考えを知る機会は設けている。
- 教師の「知らない人にも注意できるのか。」という問いに対して、「知らない人には言えない。」と答えた児童がいた。その意見をもっと取り上げていたら、より多くの意見が出たのではないか。

・教師が児童に求める終末の意見とずれている児童について。

→教材文や教師の問いかけに対して、児童それぞれ感じるところや受け止め方は違う。その時間に多くのことを考えたということが大事。成長の中で児童の心が育ち、考えが深まっていけばよいと感じる。

付箋で意見を交流しつつ、更に良くするにはどうしていくのがよいかを深く話し合った。指導者の先生にもその様子を見ていただき、ご指導いただいた。

3、指導者より

・ワークシートに自身の考えを書けない児童について

→書かせることを目的にしてはいけない。道徳の目標は道徳性を養うことである。「書く」「話し合う」「発表する」ことは、そのための手段であり目的ではない。その手段の向上については全教育活動の中で指導することで、道徳で指導することではない。

・心で思っていても行動に表せないことについて、それをよしとしてよいのか。

→心で思っている善をできないのはどうしてかを考えさせる。「どうして自信を持って言うことができなかったのか。」等、適切な発問を考える。

・価値観を可視化する方法を考えておく。例えば数値化する場合、A という考えを持つ人〇%、B という考えを持つ人〇%というように、視覚で分かりやすく把握できるようにする。

・子どもが考えたことを元に授業を組み立てる。指導案から外れたとしても、児童の的確な意見や考えを取り上げ、「なぜ？どうして？～さんならどうする？」と全体に広げ、考えさせる。

・児童の言葉で授業を進める。担任はコーディネーター役。そのためには、「聞く子」を育てることが大事。聞ける子＝発表できる子につながる。

・このような研究協議を研究後も続けていくことが重要。研究が終わってしまうとこのような協議会を行う機会が減ってしまうことが多いが、短時間でも教師同士で話し合う時間を設ける。子どものために。